

2022. 6. 5 (日) 使徒 2 : 1 ~ 4

2:1 五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

2:2 すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。

2:3 また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。

2:4 すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

<説教>

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」(使徒 1:4-5)、「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(1:8)

こう言われた復活の主イエス・キリストの命令と約束に従い、十一人の使徒たちと他の弟子たちはエルサレムで〈いつも心一つにして祈〉(1:14)りました。また、かつてイエスがお選びになった十二使徒の中からイエスを裏切って〈離れてしまった〉(1:25)ユダに代わってマツティアを選びました。そのようにして〈イエスの復活の証人〉(1:22)となるためにどうしても必要な〈聖霊によるバプテスマ〉を祈り待ち臨んでいた使徒たち弟子たちの上にととう約束の聖霊がお降りになりました。それが〈五旬節の日〉(2:1)でした。その時のことが 2 章 1 節から記されています。

「あなたがたは間もなく聖霊によるバプテスマを授けられる」というイエスの約束を信じて使徒たちが〈いつも心一つにして祈って〉いるうちに、そのイエスが天に昇られてから 10 日目(イエスが復活なさってからは 50 日目)に〈五旬節の日〉となりました。その日も彼ら彼女らはいつものように〈皆が同じ場所に集まって〉祈っていたのですが、その日に約束の〈聖霊によるバプテスマ〉が授けられたのです。もちろんそれは父なる神と御子イエスがお定めになった「時」であり、使徒たちが〈いつとか、どんな時とか〉を指定したものではありませんでした。

〈五旬節〉(ペンテコステ)とは「五十日目の祭り」という意味です。過越のいけにえを主に献げる日・過越の祭り(第一の月(アビブまたはニサンの月)の 14 日)の翌日(種なしパンの祭り)の翌日から満七週を数え(七回目の安息日の翌日まで五十日を数え)て新しい穀物(小麦)のささげ物を「初穂」として神に献げる(レビ 23 章他)感謝の時でした。それで、「七週(しちしゅう)の祭り」「刈り入れの祭り」「初穂の日」とも呼ばれていました(出エジプト記、民数記、申命記)。「過越の祭り」「仮庵の祭り」とともにユダヤ人の「三大祭り」の時であり、多くの人が礼拝のためにエルサレムに集まり、その神殿に集まっている日でした。後でペテロがその人々に「今は朝の九時です」と言います(2:15)が、それは神殿で祈りを捧げるように定められた時間でした。それでこのとき〈皆が同じ場所に集まって〉いた〈場所〉とはエルサレムの神殿のどこかだったとも考えられています。

このような旧約聖書以来のユダヤ人にとって大事な日〈五旬節の日〉を、神は、イエスの使徒たち弟子たちが〈イエスの復活の証人〉となるために聖霊を豊かに受ける時としてお定めになりました。それは神の民、私たちキリスト者の罪を取り除き、神のさばきから救うために真の過越の子羊イエス・キリストが十字架で死なれ（ニサンの月の 14 日に相当）、三日目（ニサンの月の 16 日に相当）に〈初穂として死者の中からよみがえられ〉た（I コリント 15:20）日から五十日目の日でした。それは偶然ではありませんでした。

さて約束の聖霊が使徒たち弟子たちに臨んだときの様子が 2-4 節に書かれています。〈激しい風が吹いて来たような響きが起〉きたのは〈天から〉でした(2)。当然ですが、聖霊は〈天から〉彼らの上に降りました。彼らの心の中から湧き出たのでもなく、生まれたのでもありません。イエスが言われたとおりに、聖霊は天の父なる神が御子イエスの名によってお遣わしになったのであり（ヨハネ 14:26）、またイエスが父なる神のもとからお遣わしになるお方、〈父から出る真理の御霊〉です（ヨハネ 15:26）。そして聖霊は〈イエスの御霊〉（使徒 16:7）、〈主の御霊〉（II コリント 3:17）、イエス・キリストの御霊（ピリピ 1:19）であります。「風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」（ヨハネ 3:8）とイエスが言われたように〈風〉は聖霊の象徴でした。そしてこれも〈天から〉に違いありませんが、〈炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどま〉りました(3)。「その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます」(マタイ 3:11) とのバプテスマのヨハネの言葉も思い出されます。〈舌〉(3)という言葉は〈ことば〉(4)とも訳されています。〈激しい風が吹いて来たような響き〉も〈炎のような舌〉も聖霊そのものではありませんでした。それらは、皆が〈他国のいろいろなことばで話し始め〉たのは〈皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるまま〉であることが、〈天から〉聖霊が降って〈一人ひとりの上にとどまった〉からだという「しるし」にすぎませんでした。〈一人ひとり〉〈皆が〉〈話し始めた〉内容は〈神の大きなみわざ〉(12)のことでした。ほんの五十日ほど前には人を恐れて「イエスなど知らない」としか言えなかった彼らでした。しかしそんな彼らが〈聖霊に満たされ〉たら〈皆が〉〈一人ひとり〉が自分の口で、いわば自分のことばで〈御霊が語らせるまま〉に、人を恐れずに〈神の大きなみわざ〉を、つまりイエス・キリストのことを〈イエスの復活の証人〉として〈話し始めた〉のでした。「話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話される、あなたがたの父の御霊です。」(マタイ 10:20)ともイエスは言っておられました。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。…わたしの証人となります。」と言われたイエスのみことばの通りでした。

聖霊が、聖霊の力が、本来自分たち自身の中にはなんの力も無い使徒たちの中に天から降ってお入りになって、彼らに力強く、そして命懸けで〈神の大きなみわざを〉、イエス・キリストの十字架と復活を語らせたのです。このようにして、キリストをかしらとする、キリストのからだなる、キリストの教会が、天に昇られてこの地上からはいなくなられたキリストの代理人としてこの地上で「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから」(マタイ 4:17)と宣教するキリストの教会が誕生したのです。私たちもこのキリストの教会の一員なのです。私たちも天からの聖霊を日々、ますます求めて祈り、みことばと聖霊に従い、導かれ、聖霊に満たされて、イエスの復活の証人として歩んでいくのです。